

# 第1章 2020年の気候

## 1.1 世界の天候・異常気象

- 世界各地で異常高温が観測され、各国から月平均や季節平均気温の記録更新が頻繁に伝えられた。世界の年平均気温は、1891年の統計開始以降、2016年と並び最も高い値となった。
- アジア各国や東アフリカ中部での大雨、米国南部～中米のハリケーンなどにより、多数の死者を伴う災害が発生した。

2020年に発生した主な異常気象・気象災害は、図1.1-1、表1.1-1のとおりである。

2020年は、世界各地の広い範囲で異常高温が発生し（図1.1-1中①⑤⑧⑩⑫⑬⑯⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖）、各国の月平均気温や季節平均気温の記録更新が頻繁に伝えられた。世界の年平均気温は、1891年の統計開始以降、2016年と並び最も高い値となった。シベリア及びその周辺では1～11月に異常高温となり（同図中①）、ロシアの2020年の年平均気温は、1891年以降で最も高くなった（ロシア水文気象センター）。異常低温は、中央アジア南部及びその周辺で9～12月に発生した（同図中⑨）。

ヨーロッパ西部から南部では2～3、6、8、10、12月に異常多雨となった（同図中⑪）。英国の2月の月降水量は、2月としては1862年以降で最も多くなった（英国気象局）。一方、アルゼンチン北部からブラジル南部では2～3、5、9～11月に異常少雨となった（同図中⑬）。

中国では、6～8月に長江中・下流域などで大雨となり（同図中④）、死者と行方不明者が合計で270人以上になったと伝えられた（中国政府）。フィリピン～インドシナ半島では、10～11月の大雨や台風第15～19号、第22号により（同図中⑥）、合計で340人以上が死亡したと伝えられた（フィリピン政府、ベトナム政府、欧州委員会）。南アジア及びその周辺では、6～10月の大雨により（同図中⑦）、合計で2,700人以上が死亡したと伝えられた（インド政府、ネパール政府、パキスタン政府、EM-DAT）。イエメン西部では6～8月の、スーダン、ニジェールでは6～9月の大雨

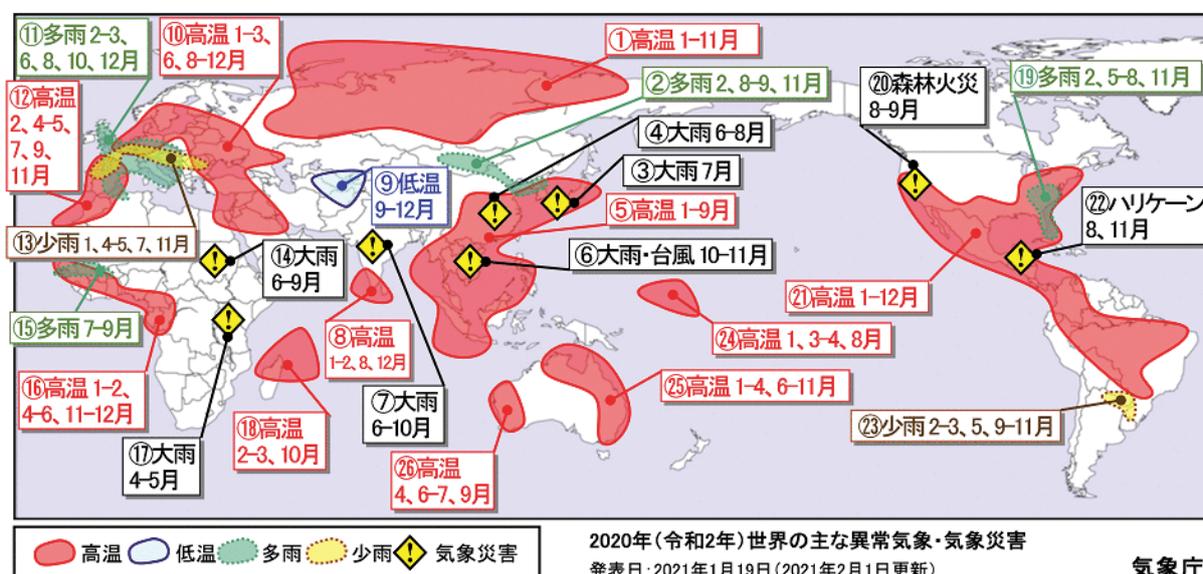


図1.1-1 2020年の主な異常気象・気象災害の分布図<sup>3</sup>

2020年に発生した異常気象や気象災害のうち、規模や被害が大きかったものについて、おおよその地域・時期を示した。「高温」「低温」「多雨」「少雨」は、月平均気温と月降水量から異常と判断した現象が1年のうち3か月以上繰り返された場合に、地理的広がりも考慮しつつ取り上げた。ここでは異常気象を、ある場所において30年に1回以下のまれな頻度で発生する現象と定義している。災害の記述は、米国国際開発庁海外災害援助局及びルーベンカトリック大学災害疫学研究所（ベルギー）による災害データベース（EM-DAT）や各国政府機関、国連、欧州委員会等の発表に基づき、人的被害や経済的損失の大きさ、地理的広がりを考慮して取り上げている。

<sup>3</sup> 気象庁ホームページでは、2006年以降の主な異常気象・気象災害の分布図を公開している。

<https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/monitor/annual/index.html>

により(同図中⑭)、合計で370人以上が死亡したと伝えられた(国連難民高等弁務官事務所、EM-DAT)。米国西部では、8～9月の森林火災(同図中⑳)により合計で30人以上が死亡したと伝えられた(米国政府)。米国南部～中米では、8月のハリケーン「LAURA」や11月のハリケーン「ETA」、「IOTA」により(同図中㉒)、合計で360人以上が死亡したと伝えられた(米国政府、国連人道問題調整事務所、欧州委員会)。

表 1.1-1 2020年の世界の主な異常気象・気象災害の概要

図 1.1-1 中の番号ごとに概要をまとめた。

異常気象の種類 (発生月)	地域	概況
① 高温(1～11月)	シベリア及びその周辺	<ul style="list-style-type: none"> <li>中央シベリア中部のビティム：1月の月平均気温<math>-14.4^{\circ}\text{C}</math>(平年差<math>+14.2^{\circ}\text{C}</math>)。</li> <li>東シベリア西部のヤクーツク：2月の月平均気温<math>-28.1^{\circ}\text{C}</math>(平年差<math>+5.6^{\circ}\text{C}</math>)。</li> <li>西シベリア中部のアレクサンドロフスコエ：3～5月の3か月平均気温<math>5.6^{\circ}\text{C}</math>(平年差<math>+7.4^{\circ}\text{C}</math>)。</li> <li>中央シベリア北部のハタンガ川：6～8月、9～11月の3か月平均気温<math>12.6^{\circ}\text{C}</math>(平年差<math>+3.4^{\circ}\text{C}</math>)、<math>-4.9^{\circ}\text{C}</math>(平年差<math>+6.6^{\circ}\text{C}</math>)。</li> <li>ロシアの9月の月平均気温は、9月としては1891年以降で最も高かった(ロシア水文気象センター)。</li> <li>ロシアの冬(前年12～2月)の3か月平均気温は、冬としては1891年以降で最も高かった(ロシア水文気象センター)。</li> <li>ロシアの2020年の年平均気温は、1891年以降で最も高かった(ロシア水文気象センター)。</li> </ul>
② 多雨(2、8～9、11月)	モンゴル中部～朝鮮半島	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国のペキン(北京)：2月の月降水量<math>35\text{mm}</math>(平年比<math>795\%</math>)。</li> <li>中国のシャンシー(山西)省タイユワン(太原)：8月の月降水量<math>254\text{mm}</math>(平年比<math>248\%</math>)。</li> <li>大韓民国北東部のカンヌン(江陵)：9月の月降水量<math>614\text{mm}</math>(平年比<math>263\%</math>)。</li> <li>中国の内モンゴル自治区エレンホト(二連浩特)：11月の月降水量<math>13\text{mm}</math>(平年比<math>591\%</math>)。</li> </ul>
③ 大雨(7月)	東日本～西日本	<ul style="list-style-type: none"> <li>東日本～西日本では、7月上旬の大雨(「令和2年7月豪雨」)により合計で84人が死亡した(9月15日現在、消防庁)。</li> <li>東日本太平洋側、西日本日本海側、西日本太平洋側の7月の月降水量は、それぞれ7月としては1946年以降で最も多かった。</li> </ul>
④ 大雨(6～8月)	中国	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国では、6～8月に長江中・下流域などで大雨となり、死者と行方不明者が合計で270人以上になったと伝えられた(中国政府)。</li> <li>中国のフーペイ(湖北)省イーチャン(宜昌)：6～8月の3か月降水量<math>1107\text{mm}</math>(平年比<math>189\%</math>)。</li> <li>中国の8月の月降水量は、8月としては1961年以降で最も多かった(中国気象局)。</li> <li>中国の夏(6～8月)の3か月降水量は、夏としては1961年以降で2番目に多かった(中国気象局)。</li> </ul>
⑤ 高温(1～9月)	東アジア東部	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国(香港)のカオルン(九竜)：1月の月平均気温<math>18.1^{\circ}\text{C}</math>(平年差</li> </ul>

	異常気象の種類 (発生月)	地域	概況
	月)	～東南アジア	<p>+2.0℃)。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大韓民国南部のチェジュ(済州)：2月の月平均気温9.1℃(平年差+2.7℃)。</li> <li>・タイ北部のチェンマイ：3～5月の3か月平均気温30.4℃(平年差+2.0℃)。</li> <li>・ラオスのビエンチャン：6～8月の3か月平均気温28.9℃(平年差+0.7℃)。</li> <li>・フィリピン中部のレガスピ：9月の月平均気温29.2℃(平年差+1.5℃)。</li> <li>・日本の1月、3月、6月の月平均気温は、それぞれの月としては1898年以降で最も高かった。</li> <li>・日本の冬(前年12～2月)の3か月平均気温は、冬としては1898年以降で最も高かった。</li> <li>・日本の2020年の年平均気温は、1898年以降で最も高かった。</li> <li>・韓国の1月、6月の月平均気温は、それぞれの月としては1973年以降で最も高かった(韓国気象局)。</li> <li>・韓国の冬(前年12～2月)の3か月平均気温は、冬としては1973年以降で最も高かった(韓国気象局)。</li> <li>・香港の1月、7月の月平均気温は、それぞれの月としては1885年以降で最も高かった(香港天文台)。</li> </ul>
⑥	大雨・台風 (10～11月)	フィリピン～ インドシナ半島	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フィリピン～インドシナ半島では、10～11月の大雨や台風第15号、第16号、第17号、第18号、第19号、第22号により、合計で340人以上が死亡したと伝えられた(フィリピン政府、ベトナム政府、欧州委員会)。</li> <li>・ラオス南部のサバナケット：10月の月降水量263mm(平年比239%)。</li> </ul>
⑦	大雨(6～10月)	南アジア及び その周辺	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南アジア及びその周辺では、6～10月の大雨により合計で2700人以上が死亡したと伝えられた(インド政府、ネパール政府、パキスタン政府、EM-DAT)。</li> </ul>
⑧	高温(1～2、 8、12月)	インド南部～ スリランカ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インド南部のマチリパトナム：1月の月平均気温26.5℃(平年差+2.0℃)。</li> <li>・スリランカ南西部のコロンボ：2月の月平均気温29.2℃(平年差+1.9℃)。</li> <li>・インド南部のティルバナナタプーラム：8月の月平均気温27.9℃(平年差+1.0℃)。</li> </ul>
⑨	低温(9～12月)	中央アジア南 部及びその周 辺	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キルギス北西部のタラス：9～11月の3か月平均気温5.9℃(平年差－3.5℃)。</li> <li>・ウズベキスタン西部のウルゲンチ：12月の月平均気温－5.3℃(平年差－5.7℃)。</li> </ul>
⑩	高温(1～3、 6、8～12月)	ヨーロッパ北 部～中東中部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ノルウェーのオスロ：1月、11月の月平均気温1.9℃(平年差+7.1℃)、4.1℃(平年差+4.4℃)。</li> <li>・ドイツ南西部のザールブリュッケン：2月の月平均気温5.8℃(平年差+4.1℃)。</li> <li>・ロシアのモスクワ：3月の月平均気温3.8℃(平年差+4.8℃)。</li> <li>・トルコ北東部のギュミュシャネ：6月の月平均気温19.2℃(平年差+1.7℃)。</li> <li>・サウジアラビア東部のダンマム：8月の月平均気温37.1℃(平年差</li> </ul>

	異常気象の種類 (発生月)	地域	概況
			<p>+0.9℃)。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ バーレーンのバーレーン：9月の月平均気温34.8℃（平年差+2.2℃）。</li> <li>・ トルコのアンカラ：9～11月の3か月平均気温15.9℃（平年差+3.0℃）。</li> <li>・ ノルウェーの冬（前年12～2月）の3か月平均気温は、冬としては1900年以降で最も高かった（ノルウェー気象局）。</li> <li>・ ノルウェーの2020年の年平均気温は、1900年以降で最も高かった（ノルウェー気象局）。</li> <li>・ デンマークの1月の月平均気温は、1月としては1874年以降で最も高かった（デンマーク気象局）。</li> <li>・ バーレーンの9月の月平均気温は、9月としては1902年以降で最も高かった（バーレーン気象局）。</li> <li>・ トルコの9月、10月の月平均気温は、それぞれの月としては1971年以降で最も高かった（トルコ気象局）。</li> <li>・ トルコの秋（9～11月）の3か月平均気温は、秋としては1971年以降で最も高かった（トルコ気象局）。</li> </ul>
⑪	多雨（2-3、6、8、10、12月）	ヨーロッパ西部～南部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ドイツ南部のアクスブルク：2月の月降水量99mm（平年比284%）。</li> <li>・ ギリシャ北部のテッサロニキ（マケドニア空港）：3月の月降水量99mm（平年比293%）。</li> <li>・ フランス中部のルピュイ：6月の月降水量171mm（平年比252%）。</li> <li>・ イタリア南東部のマリナーディジョイオサ：8月の月降水量73mm（平年比745%）。</li> <li>・ 英国北部のキンロス：10月の月降水量165mm（平年比225%）。</li> <li>・ 英国の2月の月降水量は、2月としては1862年以降で最も多かった（英国気象局）。</li> </ul>
⑫	高温（2、4～5、7、9、11月）	ヨーロッパ西部～北アフリカ西部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ フランス南部のモンペリエ：2月の月平均気温11.6℃（平年差+3.7℃）。</li> <li>・ スペイン北部のサンタンデル：4月の月平均気温14.8℃（平年差+2.3℃）。</li> <li>・ モロッコ北部のカサブランカ：5月の月平均気温20.3℃（平年差+1.8℃）。</li> <li>・ スペイン南部のコルドバ：7月の月平均気温30.7℃（平年差+2.6℃）。</li> <li>・ モロッコ北部のミデル：9月の月平均気温23.7℃（平年差+3.7℃）。</li> <li>・ スペイン南部のグラナダ空港：11月の月平均気温13.1℃（平年差+2.8℃）。</li> <li>・ フランスの冬（前年12～2月）の3か月平均気温は、冬としては1900年以降で最も高かった（フランス気象局）。</li> <li>・ フランスの2020年の年平均気温は、1900年以降で最も高かった（フランス気象局）。</li> <li>・ スペインの5月の月平均気温は、5月としては1965年以降で最も高かった（スペイン気象局）。</li> </ul>
⑬	少雨（1、4～5、7、11月）	ヨーロッパ東部～南西部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ブルガリア東部のバルナ：1月の月降水量1mm（平年比2%）。</li> <li>・ ドイツ南部のシュトゥットガルト：4月の月降水量2mm（平年比4%）。</li> <li>・ フランス南西部のグールドン：5月の月降水量31mm（平年比37%）。</li> <li>・ フランス南西部のボルドー・メリニャック：7月の月降水量3mm（平年比6%）。</li> </ul>

	異常気象の種類 (発生日)	地域	概況
			・ハンガリー南西部のノジコニジョ：11月の月降水量11mm（19%）。
⑭	大雨（6～9月）	イエメン西部、スーダン、ニジェール	・イエメン西部では6～8月の、スーダン、ニジェールでは6～9月の大雨により合計で370人以上が死亡したと伝えられた（国連難民高等弁務官事務所、EM-DAT）。
⑮	多雨（7～9月）	西アフリカ中部～西部	・マリ南西部のニオロデュサヘル：7月の月降水量256mm（平年比225%）。 ・セネガル南西部のジギンショール：8月の月降水量837mm（平年比208%）。 ・セネガル北東部のマタム：9月の月降水量230mm（平年比217%）。
⑯	高温（1～2、4～6、11～12月）	西アフリカ西部～中部アフリカの西部	・コンゴ共和国のブラザビル：1月の月平均気温27.0℃（平年差+1.1℃）。 ・セネガルのダカル：2月の月平均気温24.4℃（平年差+3.7℃）。 ・マリ南西部のキータ：4月の月平均気温34.6℃（平年差+1.6℃）。 ・中央アフリカ西部のブアル：5月の月平均気温24.0℃（平年差+1.2℃）。 ・ニジェール南東部のンギグミ：6月の月平均気温35.3℃（平年差+2.1℃）。 ・トーゴ南部のアタクパメ：11月の月平均気温28.0℃（平年差+1.6℃）。
⑰	大雨（4～5月）	東アフリカ中部及びその周辺	・東アフリカ中部及びその周辺では、4～5月の大雨により合計で500人以上が死亡したと伝えられた（欧州委員会、EM-DAT）。
⑱	高温（2～3、10月）	マダガスカル北部及びその周辺	・マダガスカル北西部のマハジャンガ：2月の月平均気温28.6℃（平年差+1.3℃）。 ・セイシエルのセイシエル国際空港：3月の月平均気温29.2℃（平年差+1.1℃）。 ・マダガスカル東部のトアマシナ：10月の月平均気温24.2℃（平年差+1.1℃）。
⑲	多雨（2、5～8、11月）	米国東部～南東部	・米国のテネシー州ノックスビル：2月の月降水量291mm（平年比270%）。 ・米国のイリノイ州シカゴ：5月の月降水量242mm（平年比260%）。 ・米国のバージニア州ワシントン・ナショナル空港：6～8月の3か月降水量476mm（平年比180%）。 ・米国のノースカロライナ州シャーロット：11月の月降水量170mm（平年比220%）。
⑳	森林火災（8～9月）	米国西部	・米国西部では、8～9月の森林火災により合計で30人以上が死亡したと伝えられた（米国政府）。 ・カリフォルニア州では、8月に発生した“August Complex”により約100万エーカー（約4180平方キロメートル）の森林が焼失し、同州としては1932年以降で最大の焼失面積になったと伝えられた（カリフォルニア州政府）。
㉑	高温（1～12月）	北米南部～南米中部	・メキシコ南東部のコミタンデドミンゲス：1月の月平均気温17.4℃（平年差+1.9℃）。 ・エクアドル東部のヌエボロカフエルテ：2月の月平均気温27.0℃（平年差+1.4℃）。

## (第1章 2020年の気候)

	異常気象の種類 (発生月)	地域	概況
			<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ジャマイカ北西部のモンテゴベイ：3～5月の3か月平均気温27.7℃（平年差+1.1℃）。</li> <li>・ ブラジル北部のマナウス：6～8月の3か月平均気温28.9℃（平年差+1.9℃）。</li> <li>・ 米国のネバダ州ラスベガス：9～11月の3か月平均気温22.9℃（平年差+2.5℃）。</li> <li>・ 米国北東部の7月の月平均気温は、7月としては1895年以降で最も高かった（米国海洋大気庁）。</li> <li>・ 米国西部と南西部の8月の月平均気温は、ともに8月としては1895年以降で最も高かった（米国海洋大気庁）。</li> <li>・ 米国西部の9月の月平均気温は、9月としては1895年以降で最も高かった（米国海洋大気庁）。</li> <li>・ 米国南西部の夏（6～8月）と米国西部の秋（9～11月）の3か月平均気温は、それぞれの季節としてはともに1895年以降で最も高かった（米国海洋大気庁）。</li> </ul>
②②	ハリケーン (8、11月)	米国南部～中米	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 米国南部～中米では、8月のハリケーン「LAURA」や11月のハリケーン「ETA」、「IOTA」により合計で360人以上が死亡したと伝えられた（米国政府、国連人道問題調整事務所、欧州委員会）。</li> </ul>
②③	少雨（2～3、5、9～11月）	アルゼンチン北部～ブラジル南部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ アルゼンチン北部のリバダビア：2月の月降水量24mm（平年比21%）。</li> <li>・ ブラジル南部のバジェ：3月の月降水量13mm（平年比8%）。</li> <li>・ アルゼンチン北部のラスロミタス：5月の月降水量0mm（5月の月降水量平年値65.3mm）。</li> <li>・ パラグアイのアスンシオン：9月の月降水量2mm（平年比3%）。</li> <li>・ アルゼンチン北東部のイグアス：9～11月3か月降水量129mm（平年比21%）</li> </ul>
②④	高温（1、3、4、8月）	ミクロネシア南東部及びその周辺	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ キリバスのタラワ：1月、3月、4月、8月の月平均気温29.2℃（平年差+1.1℃）、28.9℃（平年差+1.0℃）、29.3℃（平年差+1.4℃）、28.8℃（平年差+0.8℃）。</li> </ul>
②⑤	高温（1～4、6～11月）	オーストラリア北部～南東部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ オーストラリア東部のモーリー：1月の月平均気温30.3℃（平年差+3.6℃）。</li> <li>・ オーストラリア北東部のロックハンプトン：2月の月平均気温28.6℃（平年差+2.1℃）。</li> <li>・ オーストラリア北部のニュールンバイ／ゴヴ空港：3月の月平均気温28.5℃（平年差+1.3℃）。</li> <li>・ オーストラリア北東部のマッカイ：4月の月平均気温25.3℃（平年差+1.7℃）。</li> <li>・ オーストラリア東部のブリズベン：6～8月の3か月平均気温16.3℃（平年差+1.0℃）。</li> <li>・ オーストラリア南東部のシドニー：9～11月の3か月平均気温19.9℃（平年差+1.8℃）。</li> <li>・ オーストラリアの春（9～11月）の3か月平均気温は、春としては1910年以降で最も高かった（オーストラリア気象局）。</li> </ul>

	異常気象の種類 (発生月)	地域	概況
⑳	高温 (4、6～7、9月)	オーストラリア西部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ オーストラリア西部のリアマンス：4月の月平均気温29.1℃ (平年差+2.5℃)。</li> <li>・ オーストラリア西部のミーカサラ：6月の月平均気温16.7℃ (平年差+2.5℃)。</li> <li>・ オーストラリア西部のカーナーボン：7月の月平均気温19.1℃ (平年差+2.7℃)。</li> <li>・ オーストラリア西部のポートヘッドランド：9月の月平均気温27.1℃ (平年差+3.5℃)。</li> </ul>

年平均気温は、世界の陸上の広い範囲で平年より高く、シベリア、東アジア東部から東南アジア、ヨーロッパ及びその周辺、マダガスカル及びその周辺、北米南部から南米、オーストラリアなどでは平年よりかなり高かった (図 1.1-2)。

年降水量は、西シベリアから東アジア東部、東南アジア南部、中央アジア南部から南アジア、ヨーロッパ北部から西部、西アフリカ、北米東部～カリブ海諸国、南米東部、オーストラリア中部から南東部などでは平年より多く、中央アジア西部から東アジア中部、北アフリカ中部から西部、米国西部からメキシコ中部、南米南部などで平年より少なかった (図 1.1-3)。

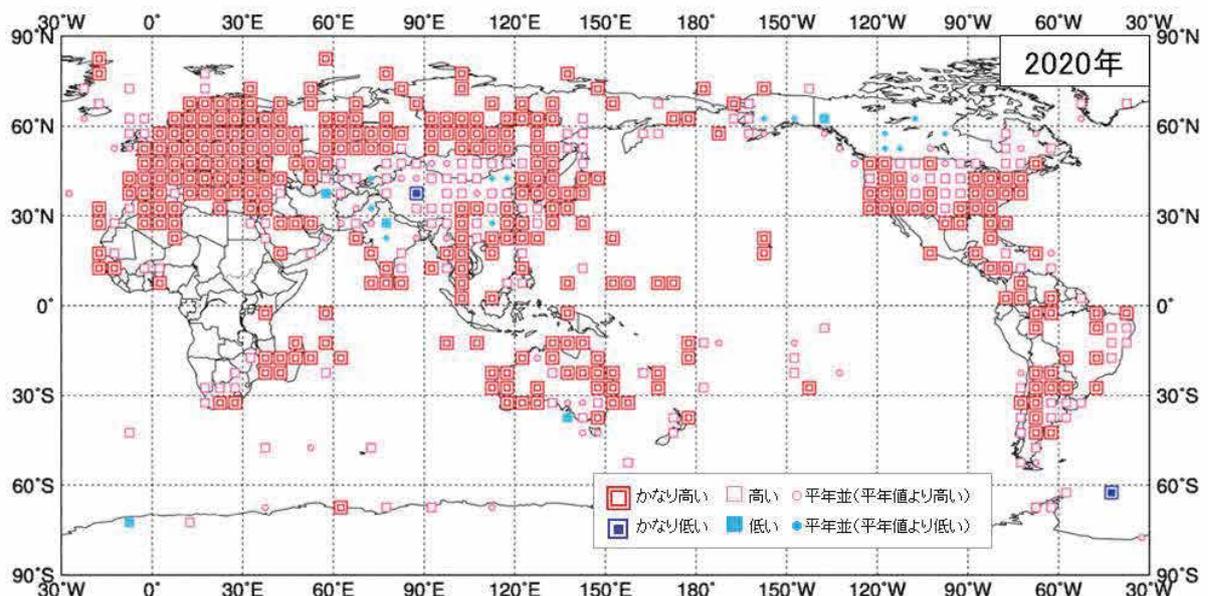


図 1.1-2 年平均気温規格化平年差階級分布図 (2020年)<sup>4</sup>

各観測点の年平均気温平年差を年の標準偏差で割り (規格化)、緯度・経度 5 度格子の領域ごとにそれらを平均した。階級区分値を-1.28、-0.44、0、+0.44、+1.28 とし、それぞれの階級を「かなり低い」「低い」「平年並 (平年値より低い)」「平年並 (平年値より高い)」「高い」「かなり高い」とした。陸域でマークのない空白域は、観測データが十分でないか、平年値がない領域を意味する。なお、平年値は 1981～2010 年の平均値。標準偏差の統計期間も 1981～2010 年。

<sup>4</sup> 気象庁ホームページでは、2016 年以降の年平均気温規格化平年差階級分布図、年降水量平年比分布図を公開している。

<https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/monitor/climfig/?tm=annual>

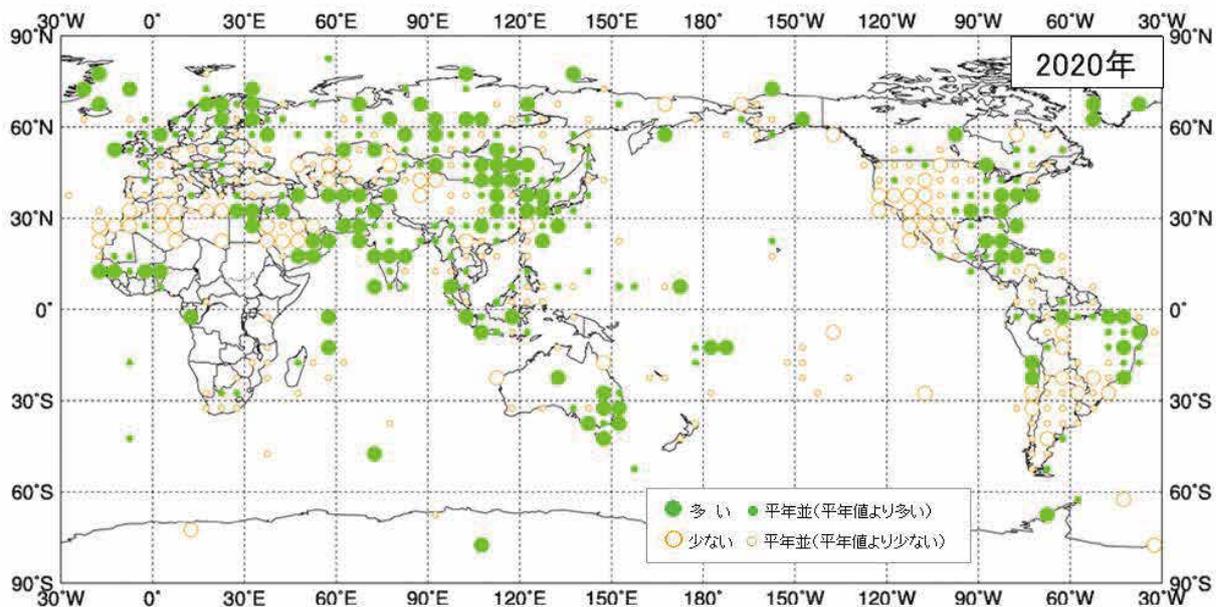


図 1.1-3 年降水量平年比分布図 (2020年)<sup>3</sup>

各観測点の年降水量平年比を緯度・経度 5 度格子の領域ごとに平均した。階級区分値を 70%、100%、120%とし、それぞれの階級区分を「少ない」「平年並 (平年値より少ない)」「平年並 (平年値より多い)」「多い」とした。陸域でマークのない空白域は、観測データが十分でないか、平年値がない領域を意味する。なお、平年値は 1981～2010 年の平均値。

## 1.2 日本の天候・異常気象<sup>5</sup>

- 気温の高い状態が続き、年平均気温は全国的にかなり高かった。
- 全国的に暖冬で、東・西日本で記録的な高温、日本海側で記録的な少雪となった。
- 「令和2年7月豪雨」など7月は東・西日本で記録的な大雨と日照不足となった。

### 1.2.1 年間の天候

2020年の日本の年平均気温平年差、年降水量平年比、年間日照時間平年比の分布を図1.2-1に示す。年統計値の特徴は以下のとおりである。

- 年平均気温：全国的にかなり高かった。
- 年降水量：西日本日本海側でかなり多く、北日本日本海側と東・西日本太平洋側、沖縄・奄美では多かった。北日本太平洋側と東日本日本海側で平年並だった。
- 年間日照時間：東日本太平洋側と西日本で多かった。一方、北日本太平洋側で少なかった。北・東日本日本海側と沖縄・奄美で平年並だった。

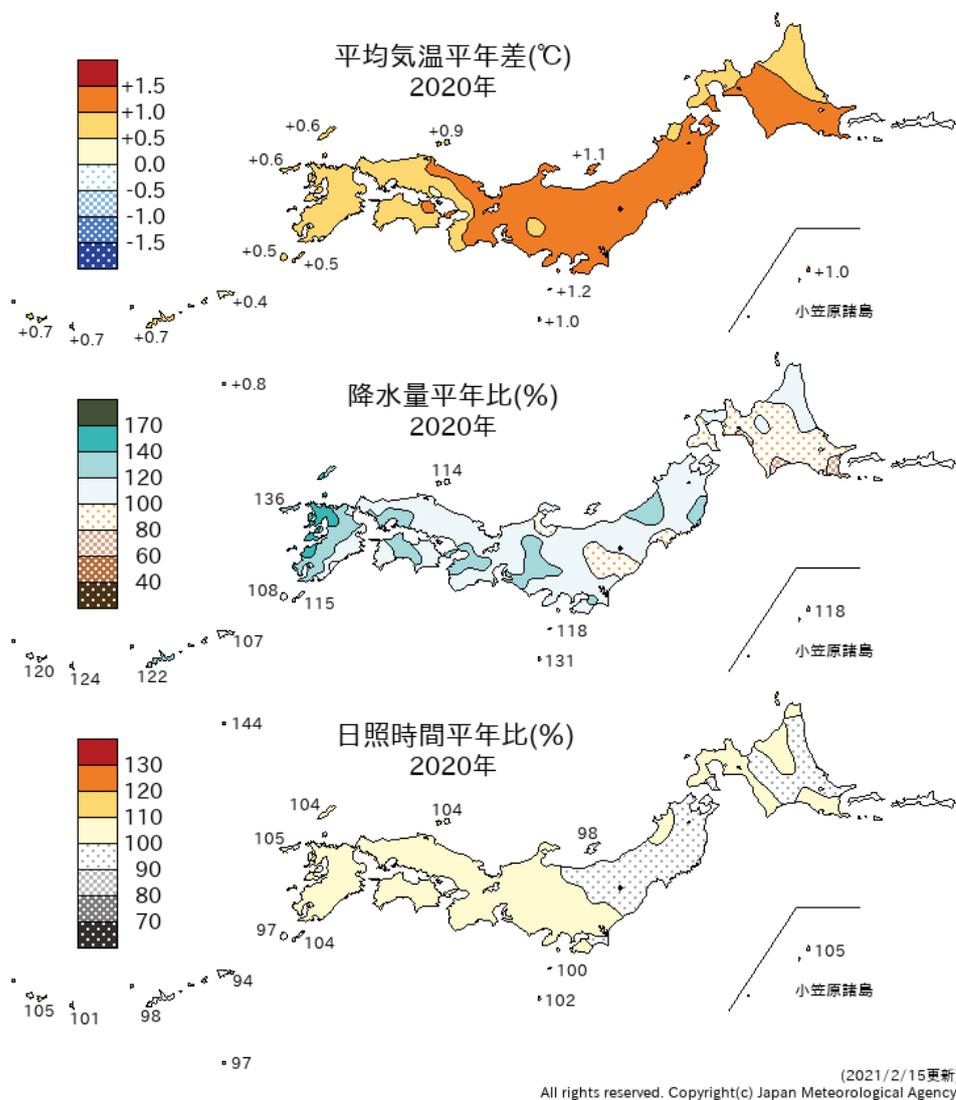


図1.2-1 日本における2020年の年平均気温平年差、年降水量平年比、年間日照時間平年比の分布  
平年値は1981～2010年の平均値。

<sup>5</sup> 観測された気温や降水量が、平年値（1981～2010年の平均値）を計算した期間の累積度数の上位10%の値を超える場合に「かなり高い（多い）」、下位10%以下の場合に「かなり低い（少ない）」と表現している。

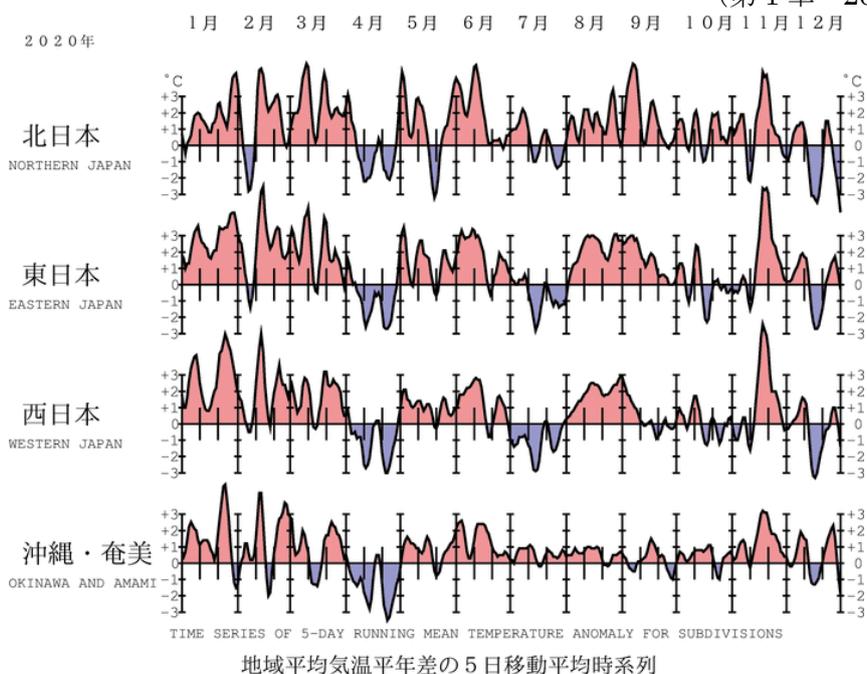


図1.2-2 地域平均気温平年差の5日移動平均時系列 (2020年1~12月)

平年値は1981~2010年の平均値。

## 1.2.2 季節別の天候

2020年の日本の地域別平均気温平年差の経過を図1.2-2に、日本の季節別の平均気温平年差、降水量平年比、日照時間平年比の分布を図1.2-3に示す。また、月統計値で記録を更新した地点数と主な地域を表1.2-1に示す。季節別の天候の特徴は以下のとおりである。

### (1) 冬 (2019年12月~2020年2月) <トピックス p.1~3 参照>

- 平均気温：東・西日本と沖縄・奄美でかなり高く、北日本では高かった。
- 降水量：北日本日本海側でかなり少なく、東日本日本海側と沖縄・奄美では少なかった。一方、西日本日本海側でかなり多く、西日本太平洋側では多かった。北・東日本太平洋側では平年並だった。
- 日照時間：沖縄・奄美でかなり多く、北・東日本日本海側で多かった。一方、東日本太平洋側でかなり少なく、西日本で少なかった。北日本太平洋側では平年並だった。

冬 (2019年12月~2020年2月) は、12月上旬に北日本と沖縄・奄美を中心に、また、2月上旬には北日本で一時的に強い寒気の影響を受けたほかは、冬を通して冬型の気圧配置となる日が少なかったことや、寒気の流入が弱かったことから、全国的に高温となる時期が多かった。特に、東・西日本では冬の平均気温の平年差がそれぞれ+2.2℃、+2.0℃と、冬として最も高い記録を更新した (統計開始は1946/1947年冬)。また、冬の降雪量は全国的にかなり少なく、北・東日本日本海側では平年比がそれぞれ44%、7%と最も少ない記録を更新した (統計開始は1961/1962年冬)。

### (2) 春 (2020年3~5月)

- 平均気温：北日本でかなり高く、東・西日本で高かった。沖縄・奄美では平年並だった。
- 降水量：北日本と沖縄・奄美で多かった。東・西日本では平年並だった。
- 日照時間：東日本太平洋側と西日本でかなり多く、東日本日本海側で多かった。北日本と沖縄・奄美では平年並だった。

春は、本州付近を低気圧や前線、高気圧が交互に通過したため、全国的に天気は数日の周期で変わった。3月から4月にかけては、西日本を中心に移動性高気圧に覆われて晴れた日が多かったため、春の日照時間は東日本太平洋側と西日本でかなり多かった。一方、北日本では、3月と4月に、発達しながら通過した低気圧や前線、湿った空気の影響を時々受けたため、春の降水量は多かった。春の平均気温は、北日本でかなり高く、東・西日本で高かったが、月ごとの変動が大きかった。

### (3) 夏 (2020年6~8月)

- 平均気温：東日本と沖縄・奄美でかなり高く、北・西日本では高かった。
- 降水量：東・西日本と沖縄・奄美でかなり多く、北日本日本海側では多かった。北日本太平洋側では平年並だった。
- 日照時間：東日本日本海側と沖縄・奄美で少なかった。東日本太平洋側と北・西日本では平年並だった。

夏は、北日本から西日本にかけて、6月上旬に高気圧に覆われて晴れの日が多かったが、6月中旬からは梅雨前線が本州付近に停滞しやすく、曇りや雨の日が多かった。特に7月になると梅雨前線が本州付近に停滞した日が多かったため、東・西日本を中心に各地で長期間にわたって大雨となった（「令和2年7月豪雨」）。7月の月降水量は、東日本太平洋側、西日本日本海側、西日本太平洋側で7月として最も多い記録を更新した。7月の月間日照時間も、東・西日本（それぞれ日本海側、太平洋側）で7月として最も少ない記録を更新した（統計開始はともに1946年）。梅雨明けは沖縄地方を除き全国的に遅く、東北北部では梅雨明けが特定できなかった。8月は、東・西日本では一転して太平洋高気圧に覆われて晴れの日が多くなった。夏の平均気温は、全国的に高く、東日本と沖縄・奄美ではかなり高かった。特に、6月と8月は東・西日本でそれぞれの月として最も高い記録を更新した（統計開始は1946年、西日本はともにタイ記録）。また、8月17日には浜松（静岡県）で歴代全国1位タイの41.1℃を観測した。

### (4) 秋 (2020年9~11月)

- 平均気温：北日本と沖縄・奄美でかなり高く、東日本では高かった。西日本では平年並だった。
- 降水量：西日本太平洋側で多かった。一方、北日本太平洋側と東日本日本海側、沖縄・奄美で少なく、北・西日本日本海側と東日本太平洋側では平年並だった。
- 日照時間：北日本で少なかった。一方、東・西日本日本海側で多く、東・西日本太平洋側と沖縄・奄美では平年並だった。

秋の前半は、低気圧や前線及び台風の影響で、全国的に曇りや雨の日が多かった。西日本太平洋側では9月上旬に大型で非常に強い勢力で接近した台風第10号をはじめ、低気圧や前線などの影響を受けたため、降水量は多かった。秋の後半は、低気圧と高気圧の影響を交互に受けて、全国的に天気は数日の周期で変わったが、東・西日本を中心に移動性高気圧に覆われて晴れる日が多かった。気温は、9月前半は北・東日本を中心に残暑が厳しかった。また、11月後半は全国的に北日本以北を通過する低気圧に向かう暖かい空気が流れ込み顕著な高温となった。

### (5) 初冬 (2020年12月)

中旬と下旬後半に冬型の気圧配置が強まり、上空に強い寒気が流れ込んだため、北陸地方を中心に記録的な大雪となった所があった。月平均気温は北・西日本で低かった。

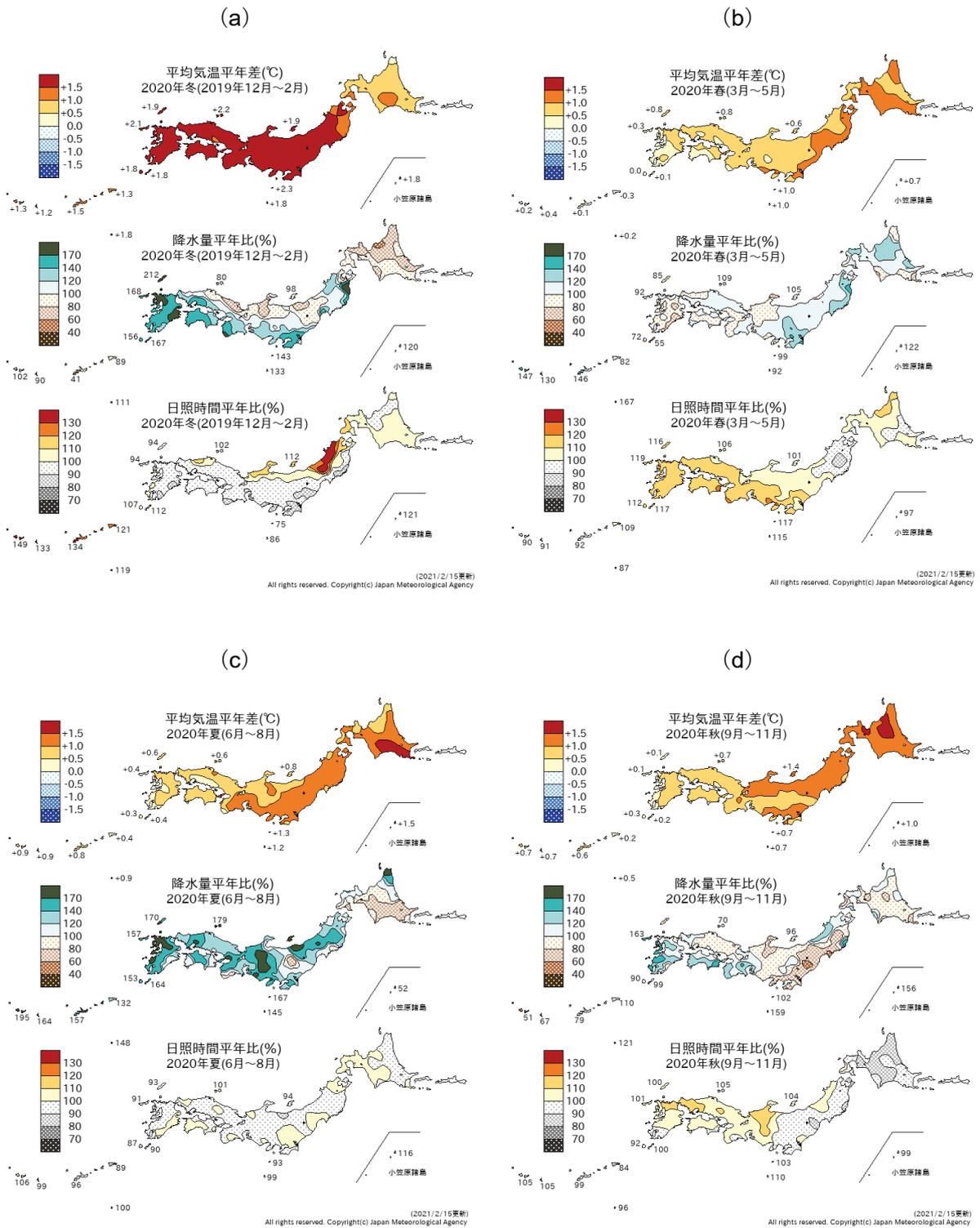


図 1.2-3 日本における2020年の季節別の平均気温、降水量、日照時間の平年差(比)分布<sup>6</sup>

(a) : 冬 (2019年12月~2020年2月)、(b) : 春 (3~5月)、(c) : 夏 (6~8月)、(d) : 秋 (9~11月)  
平年値は1981~2010年の平均値。

<sup>6</sup> 気象庁ホームページでは、1961年冬(前年12~2月)以降の季節の分布図を公開している。  
[https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/db/longfcst/trsmmap\\_seasonal.html](https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/db/longfcst/trsmmap_seasonal.html)

**表 1.2-1 月平均気温、月降水量、月間日照時間の記録を更新した地点数（2020 年）**

全国 153 地点の気象台等の統計値の中で、観測史上 1 位となった地点数を記載した。値は 1 位を更新した地点数。タイ記録は含まない。タイ記録がある場合には「値々」として横に併記した。地域は観測史上 1 位（タイ記録を含む）となった地域を記載した。

（気温）北：北日本、東：東日本、西：西日本、沖奄：沖縄・奄美

（降水量、日照時間）北日：北日本日本海側、北太：北日本太平洋側、東日：東日本日本海側、東太：東日本太平洋側、西日：西日本日本海側、西太：西日本太平洋側、沖奄：沖縄・奄美（北、東、西は、日本海側、太平洋側ともに 1 位）

	平均気温(地点)		降水量(地点)		日照時間(地点)	
	高い記録	低い記録	多い記録	少ない記録	多い記録	少ない記録
1 月	92、13 々 東、西		2	3、1 々 北日		
2 月	19、4 々			2	1	
3 月	26、12 々 北					
4 月			5	2	26	
5 月	2		1	6		
6 月	36、14 々 東、西			1		
7 月	1、1 々		17 東太、西		1	45、1 々 東、西
8 月	42、8 々 東、西		1	4、1 々 東太、西太	12 西太	
9 月	1					
10 月	1					
11 月	1 々			1	4	
12 月			3	5、4 々 北太	6	4 沖奄

### 1.3 大気・海洋の特徴<sup>7</sup>

- 2019/2020年冬は正の北極振動が卓越し、ヨーロッパ～東アジアの広い範囲で高温となった。
- 2019年夏～秋に発生した正のインド洋ダイポールモード現象の後、年を通じてインド洋熱帯域では海面水温が高かった。特に2020年7月は、積雲対流活動がインド洋西部で活発、アジアモンスーン域で不活発となったことで、ユーラシア大陸上の亜熱帯ジェット気流の北上が遅れ、かつ太平洋高気圧の南西への張り出しが強まったため、長江流域～日本付近で梅雨前線が停滞しやすかった。
- 夏から秋にかけてラニーニャ現象が発生・発達し、太平洋赤道域の海面水温は、夏以降、西部で顕著な正偏差、中部から東部にかけて顕著な負偏差となった。秋には、インド洋～太平洋の熱帯対流圏下層の循環偏差に、ラニーニャ現象の影響が現れたとみられる。

異常気象の要因を把握するためには、上空の大気の流れや熱帯の積雲対流活動、海面水温、夏季アジアモンスーン等の状況など、大気・海洋の特徴を把握することが重要である<sup>8</sup>。以下では、2020年のこれらの特徴について記述する。

#### 1.3.1 季節別の大気・海洋の特徴

##### (1) 冬 (2019年12月～2020年2月)

海面水温は太平洋赤道域西部で顕著な正偏差となった。インド洋では、2019年秋に終息した正のインド洋ダイポールモード現象の後、熱帯域のほぼ全域で顕著な正偏差となった(図1.3-1(a))。

熱帯の積雲対流活動は、インド洋熱帯域の西部、太平洋赤道域の日付変更線付近、北太平洋熱帯域中部の北緯10度帯で活発、インドネシア付近で不活発だった(同図(b))。熱帯の対流圏下層は、日付変更線の西で南北半球対の低気圧性循環偏差、インド洋の中部～インドネシア付近で南北半球対の高気圧性循環偏差となった(同図(c))。

500hPa高度を見ると、日本付近、北太平洋中緯度帯の中・東部、ヨーロッパ南部付近で正偏差(平年と比べて高度が高い)、アラスカ、アイスランド付近で負偏差(平年と比べて高度が低い)となった(同図(d))。偏西風は、南アジア北部～中国南部では平年の位置と比べて南寄りを、北太平洋中緯度帯の西部では平年の位置と比べて北寄りを流れた。海面気圧は、北極域の広い範囲で負偏差となり、正の北極振動が卓越した。また、アリューシャン低気圧とシベリア高気圧はともに平年と比べて弱かった(同図(e))。850hPa気温をみると、北米東部、ヨーロッパ～東アジアの広い範囲で高温偏差、アラスカ付近、グリーンランドの南海上で低温偏差となった。(同図(f))。

<sup>7</sup> 本節の説明で言及する「エルニーニョ/ラニーニャ現象」「北極振動」「モンスーン」「インド洋ダイポールモード現象」については、巻末の用語一覧を参照のこと。

<sup>8</sup> 大気・海洋の特徴の監視に用いられる代表的な図としては、以下のものがある。

- ・海面水温図：海面水温の分布を表し、エルニーニョ/ラニーニャ現象等の海洋変動の監視に用いられる。
- ・外向き長波放射量図：晴天時は地表から、雲のある場合は雲の上端から、宇宙に向かって放出される長波放射の強さを表す。この強さは雲の上端の高さに対応するため、積雲対流活動の監視に用いられる。
- ・850hPa流線関数図：上空1,500m付近の大気の流れや気圧配置を表し、太平洋高気圧等の監視に用いられる。
- ・500hPa高度図：上空5,500m付近の大気の流れや気圧配置を表し、偏西風の蛇行や極渦等の監視に用いられる。
- ・海面気圧図：地表の大気の流れや気圧配置を表し、太平洋高気圧やシベリア高気圧、北極振動等の監視に用いられる。
- ・850hPa気温図：上空1,500m付近の気温の分布を表す。
- ・対流圏層厚換算温度：2つの等圧面(300hPa面と850hPa面)の間の気層の平均気温を表し、対流圏の平均気温の監視に用いられる。

これらの図やより詳しい情報については、下記の気象庁ホームページに掲載している。

・海面水温：<https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/data/elnino/clmrep/sst-ano-global-seas.html>

・外向き長波放射量、850hPa流線関数、500hPa高度、海面気圧及び850hPa気温：

[https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/db/diag/db\\_hist\\_3mon.html](https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/db/diag/db_hist_3mon.html)

・対流圏層厚換算温度：[https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/db/diag/db\\_hist\\_indx.html](https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/db/diag/db_hist_indx.html)

・熱帯の大気および海洋の監視指数(夏季アジアモンスーン)：

[https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/db/diag/2019/index/html/soiolru/index\\_html\\_soiolru\\_2019.html](https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/db/diag/2019/index/html/soiolru/index_html_soiolru_2019.html)

## (2) 春 (2020年3~5月)

海面水温は太平洋赤道域の西部、インド洋熱帯域のほぼ全域で顕著な正偏差だった(図 1.3-2(a))。

熱帯の積雲対流活動は、南インド洋熱帯域の西部で活発、南シナ海、南太平洋熱帯域の中~東部、南米の北西部で不活発だった(同図(b))。熱帯の対流圏下層は、ニューギニア島の東~南太平洋熱帯域の中部で高気圧性循環偏差が見られた(同図(c))。

500hPa 高度を見ると、北半球対流圏の極渦は平年よりも強かった。ユーラシア大陸北部~北太平洋北部では波列パターンが卓越し、西・中央シベリア、アラスカの南で高度の正偏差、ヨーロッパ北東部で負偏差となった(同図(d))。ユーラシア大陸南部~日本付近では亜熱帯ジェット気流が平年と比べて南寄りを流れた。北米~北大西洋中部では偏西風が平年より強かった。海面気圧は、ヨーロッパ中部、アラスカの南で正偏差、北極付近~ロシア西部、日本付近で負偏差となった(同図(e))。850hPa 気温は、西・中央シベリア、アラスカの南で高温偏差、カナダ、ヨーロッパ北東部、南アジア北部で低温偏差となった。(同図(f))。

## (3) 夏 (2020年6~8月)

太平洋赤道域の海面水温は、西部で顕著な正偏差、東部で顕著な負偏差となり、ラニーニャ現象が発生した。インド洋では熱帯域のほぼ全域で顕著な正偏差が見られた(図 1.3-3(a))。

熱帯の積雲対流活動は、インド洋西部で活発、太平洋赤道域の西・中部で不活発だった(同図(b))。熱帯の対流圏下層は、太平洋西部で南北半球対の高気圧性循環偏差となった(同図(c))。

500hPa 高度は、日本の南東海上、北太平洋中・東部の北緯 40 度帯、カナダ中部で正偏差、カスピ海~東アジア北西部、北米北西部で負偏差となった。亜熱帯ジェット気流は中央アジア~東アジア西部で平年と比べて南寄りを流れた(同図(d))。太平洋高気圧は日本の南海上で南西への張り出しが平年と比べて強かったが、8月上旬~中旬には一転して本州付近へ張り出しが強まった時期があった(同図(e))。特に、7月はアジアモンスーン域の積雲対流活動が抑制された(図 1.3-7) ことに対応して、アジア域全体で亜熱帯ジェット気流の北上が遅れ、かつ太平洋高気圧の南西への張り出しが強まったため、長江流域~日本付近で梅雨前線が停滞しやすく、各地で大雨による被害が発生した(図 1.1-1③④)。850hPa 気温は、北極付近~中央シベリア、日本の東海上、カナダ中部~米国西部で高温偏差、オホーツク海西部で低温偏差となった(同図(f))。

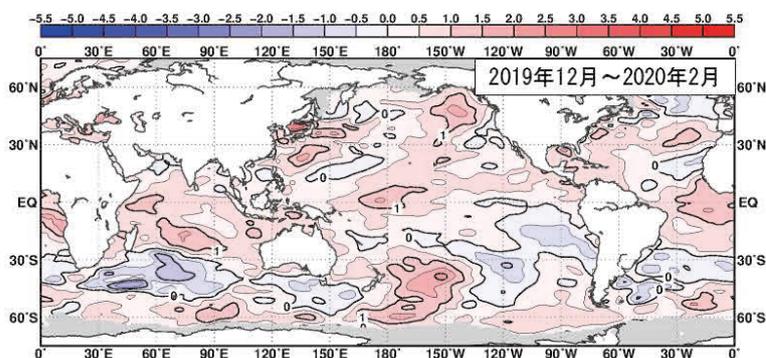
## (4) 秋 (2020年9~11月)

太平洋赤道域の海面水温は、150°E 以西で顕著な正偏差、中部から東部にかけて顕著な負偏差となり、ラニーニャ現象が発達した(図 1.3-4(a))。

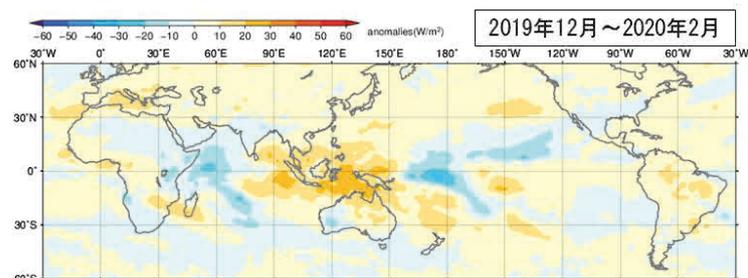
熱帯の積雲対流活動は、北インド洋~インドネシア付近、カリブ海で活発、太平洋赤道域の日付変更線の西~北太平洋熱帯域の中部で不活発だった。(同図(b))。熱帯の対流圏下層では、インド洋熱帯域と大西洋熱帯域で南北半球対の低気圧性循環偏差、太平洋熱帯域で南北半球対の高気圧性循環偏差となった(同図(c))。特にインド洋~太平洋の熱帯域で見られた下層の循環偏差は、ラニーニャ現象の影響が現れたものとみられる。

500hPa 高度を見ると、北半球の極渦は北米側に偏った。また、ユーラシア大陸北部の広い範囲、中国南部、日本の南東海上、北太平洋東部~米国~北大西洋中緯度帯の中部で正偏差、中央アジアで負偏差が見られた(同図(d))。ユーラシア大陸上の亜熱帯ジェット気流は平年よりも北寄りを流れた。北太平洋、北米東部~北大西洋でも偏西風が平年よりも北寄りを流れた。海面気圧は、北極域で負偏差、中緯度帯の広い範囲で正偏差となる環状の偏差パターンが卓越し、特に、北大西洋中緯度帯、ロシア西部~中央アジアで顕著な正偏差が見られた(同図(e))。850hPa 気温は、ユーラシア大陸北部の広い範囲、地中海東部付近で高温偏差、中央アジアで低温偏差となった(同図(f))。

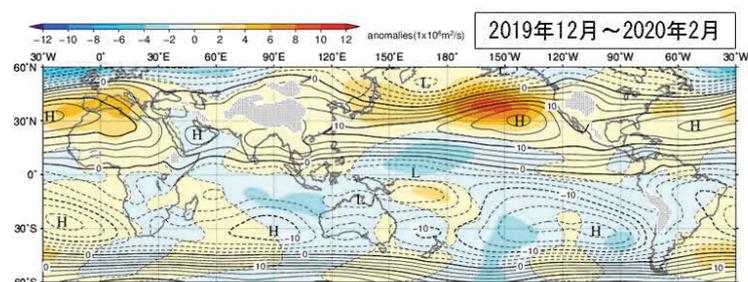
(a) 海面水温平年偏差



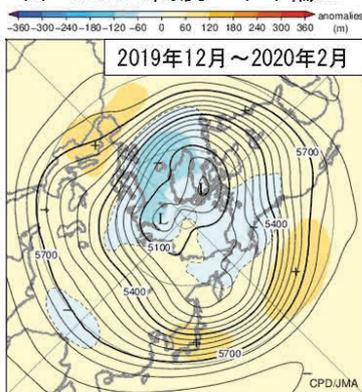
(b) 外向き長波放射量平年偏差



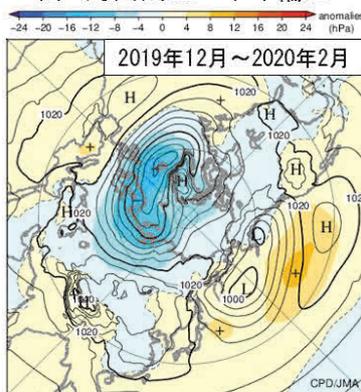
(c) 850hPa流線関数・平年偏差



(d) 500hPa高度・平年偏差



(e) 海面気圧・平年偏差



(f) 850hPa気温・平年偏差

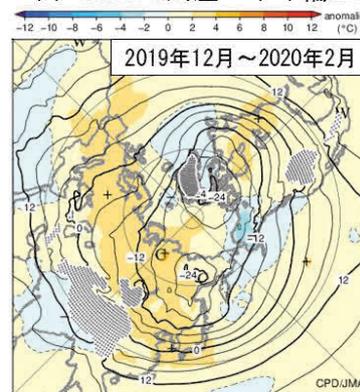


図 1.3-1 3か月平均の海面水温、大気の循環図 (2019年12月～2020年2月)

平年値は1981～2010年の平均値。陰影は平年偏差。(a)は気象庁の海面水温格子点データ(COBE-SST) (Ishii et al., 2005)、(b)は米国海洋大気庁より提供された外向き長波放射量データ、(c)～(f)は気象庁55年長期再解析(JRA-55) (Kobayashi et al., 2015)に基づく。

(a) 海面水温平年偏差。等値線の間隔は0.5°C。灰色陰影は海水域を表す。

(b) 外向き長波放射量平年偏差。単位はW/m²。熱帯域では、負偏差(寒色)域は積雲対流活動が平年より活発で、正偏差(暖色域)は平年より不活発と推定される。

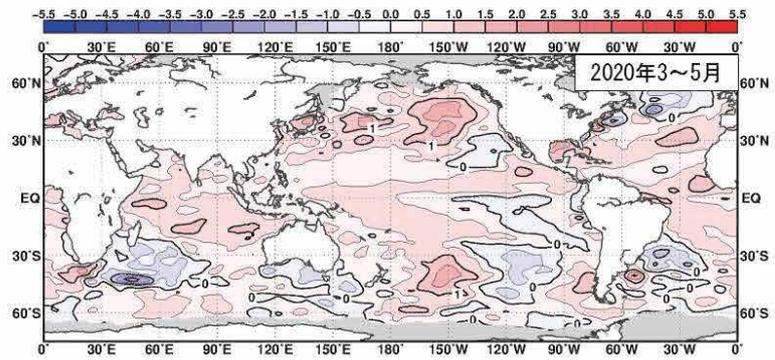
(c) 850hPa流線関数及び平年偏差。等値線の間隔は $2.5 \times 10^6 \text{m}^2/\text{s}$ 。北(南)半球では、流線関数が正(負)の値の場合は高(低)気圧性循環、負(正)の値の場合は、低(高)気圧性循環を表す。

(d) 500hPa高度及び平年偏差。等値線の間隔は60m。等値線が高緯度側に出っ張っているところ(凸部分)は高圧部、低緯度側に凹んでいるところは低圧部に対応する。偏西風は等値線に沿って流れ、等値線間隔の広いところは風が弱く、狭いところは強い。

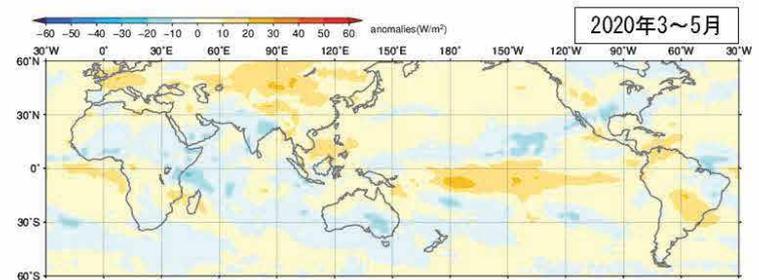
(e) 海面気圧及び平年偏差。等値線の間隔は4hPa。

(f) 850hPa気温及び平年偏差。等値線の間隔は4°C。点状の陰影域は高度1,600m以上の領域を表す。

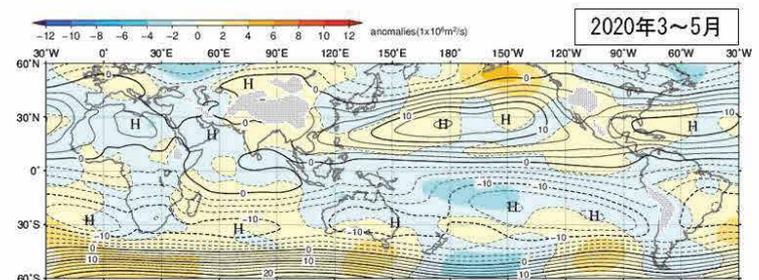
(a) 海面水温平年偏差



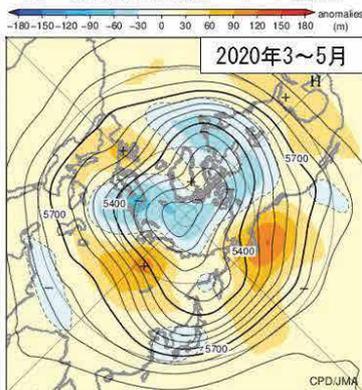
(b) 外向き長波放射量平年偏差



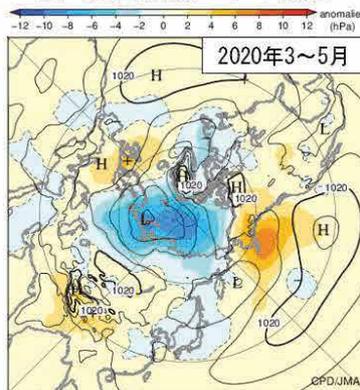
(c) 850hPa流線関数・平年偏差



(d) 500hPa高度・平年偏差



(e) 海面気圧・平年偏差



(f) 850hPa気温・平年偏差

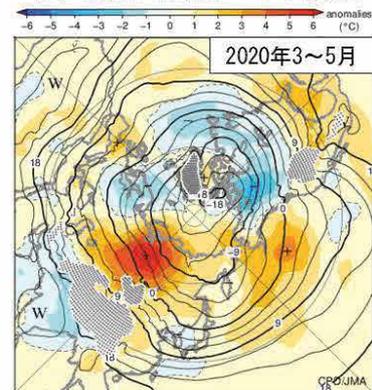
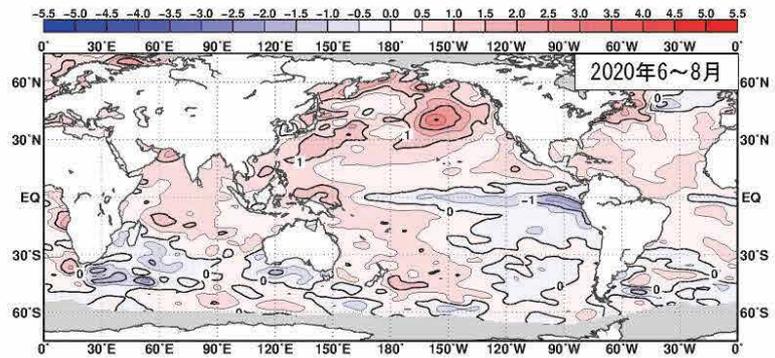


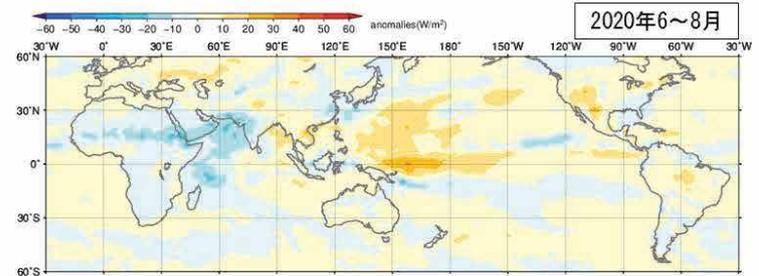
図 1.3-2 3 か月平均の海面水温、大気の循環図 (2020年3~5月)

図の見方は図 1.3-1 と同様。但し(f)の等値線の間隔は 3°C。

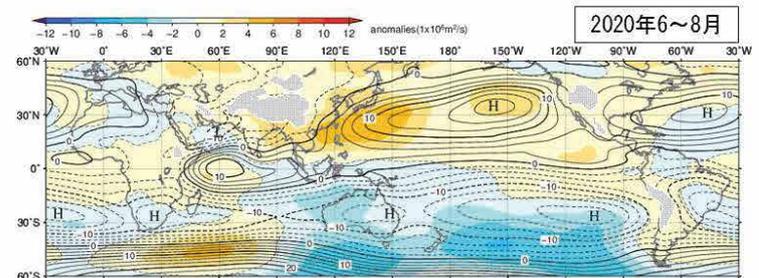
(a) 海面水温平年偏差



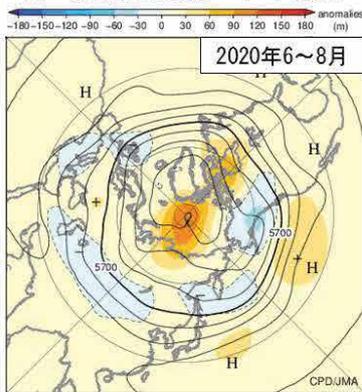
(b) 外向き長波放射量平年偏差



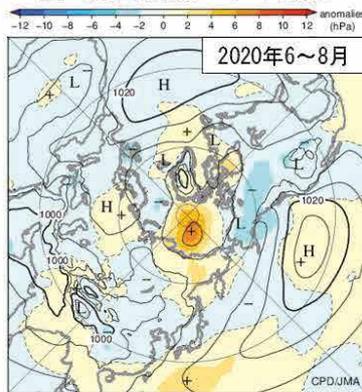
(c) 850hPa流線関数・平年偏差



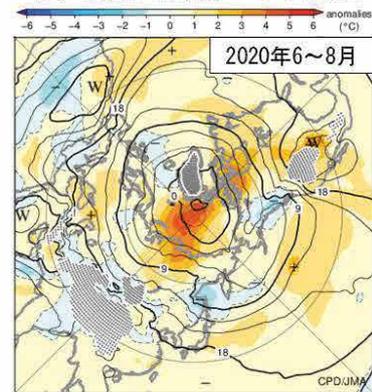
(d) 500hPa高度・平年偏差



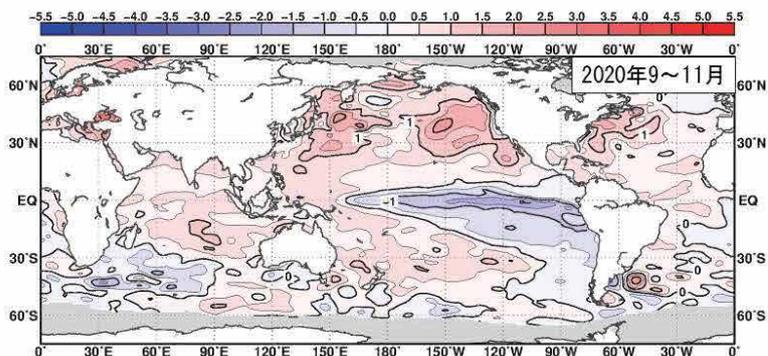
(e) 海面気圧・平年偏差



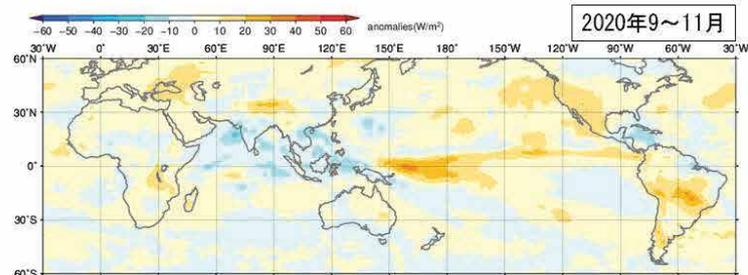
(f) 850hPa気温・平年偏差



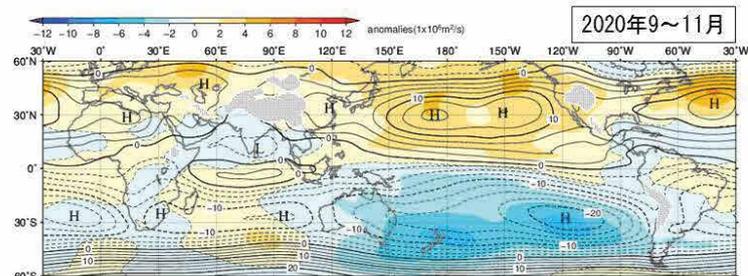
(a) 海面水温平年偏差



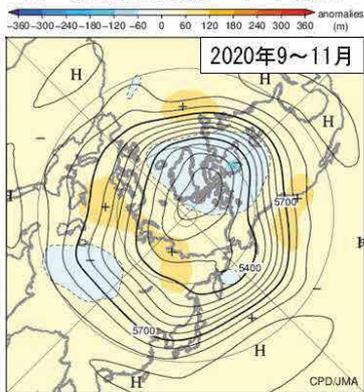
(b) 外向き長波放射量平年偏差



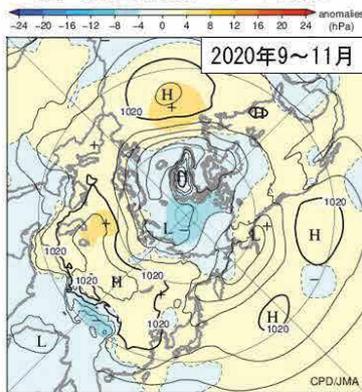
(c) 850hPa流線関数・平年偏差



(d) 500hPa高度・平年偏差



(e) 海面気圧・平年偏差



(f) 850hPa気温・平年偏差

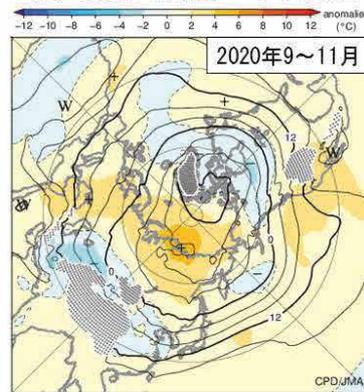


図 1.3-4 3 か月平均の海面水温、大気の循環図 (2020 年 9~11 月)

図の見方は図 1.3-1 と同様。

### 1.3.2 対流圏の平均気温

対流圏の全球平均気温(図1.3-5)は、2018年春以降2020年初めにかけて上昇が続き、2020年を通じて平年より高い状態が持続した。特に、2020年7月(図1.3-6)と11月には、それぞれの月として1958年以降で最も高い値となった。

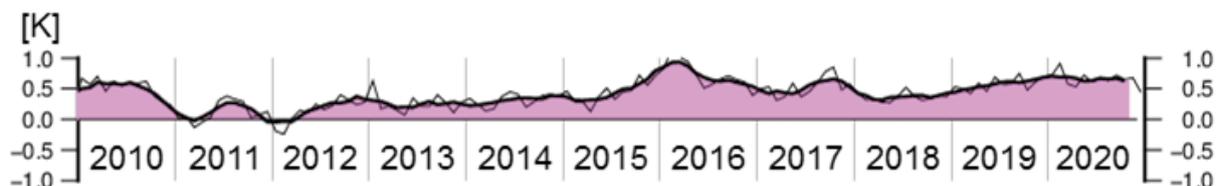


図1.3-5 対流圏の全球平均層厚換算温度平年偏差の時間変化(K)  
細線は月平均値、滑らかな太線は5か月移動平均値を示し、正(負)の値は平年値より高い(低い)ことを示す。平年値は1981~2010年の平均値。気象庁55年長期再解析(JRA-55; Kobayashi et al., 2015)に基づく。

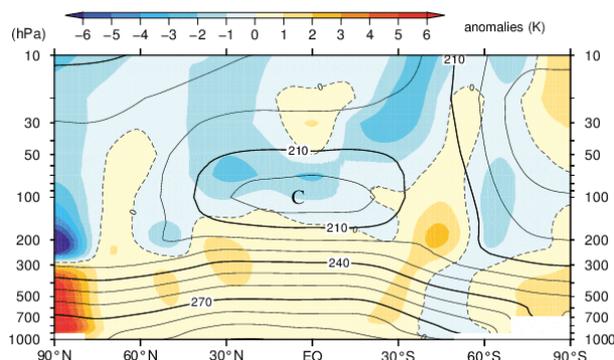


図1.3-6 带状平均気温の高度・緯度断面図(2020年7月)  
等値線は带状平均気温で、間隔は10K。陰影は带状平均気温平年偏差を示し、正(負)の値はその高度・緯度において平年値より気温が高かったことを示す。平年値は1981~2010年の平均値。気象庁55年長期再解析(JRA-55; Kobayashi et al., 2015)に基づく。

### 1.3.3 夏季アジアモンスーン

夏季アジアモンスーン期(6~9月)におけるベンガル湾~フィリピン付近の積雲対流活動は、8月上旬頃に活発となった時期があったが、概ね不活発であった(図1.3-7)。特に7月に不活発が顕著だったことは、ユーラシア大陸上の亜熱帯ジェット気流の北上が遅れ、長江流域~日本付近で梅雨前線が停滞しやすかったことに影響したと考えられる。一方、8月上旬には積雲対流活動が活発となり、太平洋高気圧の本州付近への張り出しが強まったことに影響したと考えられる。

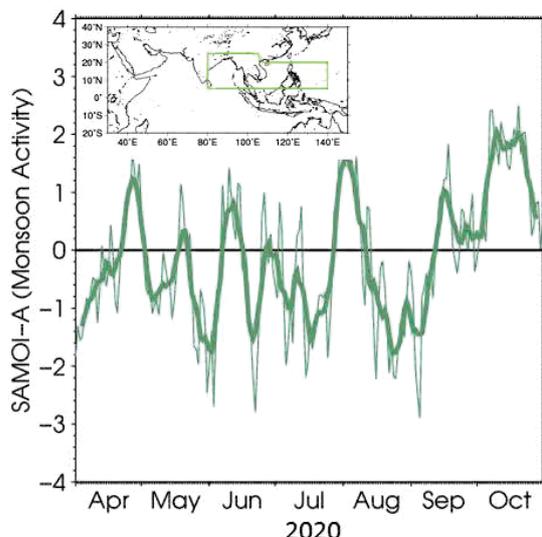


図1.3-7 夏季アジアモンスーン OLR 指数(SAMOI(A))の時系列(2020年4~10月)  
細線は日別値、滑らかな太線は7日移動平均値。SAMOI(A)(気象庁, 1997)は、外向き長波放射量平年偏差を図中地図の緑枠の領域で平均し、年々変動の標準偏差で規格化した後に符号を反転した値で、正(負)の値は夏季アジアモンスーンの対流活動が活発(不活発)であることを示す。平年値は1981~2010年の平均値。外向き長波放射量は米国海洋大気庁より提供されたデータに基づく。

### 1.3.4 台風<sup>9</sup>

2020年の台風の発生数は23個（平年値<sup>10</sup>25.6個）で平年より少なかった（図1.3-8、表1.3-1）。7月までの台風の発生数は2個（平年値7.7個）と平年よりも少なく、第3号の発生は8月1日9時で、第3号としては台風の統計を開始した1951年以降で2番目に遅い発生であった。この要因としては、7月までインド洋において海面水温が高く対流活動が活発で、台風が発生する南シナ海やフィリピンの東側の海域において相対的に対流活動が不活発であった（1.3.1参照）ことが挙げられる。一方、8月以降の発生数は21個（平年値17.8個）と平年より多かった。

2020年の日本への台風の接近数は7個（平年値11.4個）で平年より少なかった。日本に上陸した台風は0個（平年値2.7個）だった。上陸が無いのは2008年以来で、1951年以降では5回目だった。

日本に接近した台風のうち、台風第10号は上陸には至らなかったものの九州のかなり近くを通過し、南西諸島や九州を中心に観測史上1位の値を超えるなど記録的な暴風となるとともに宮崎県などで大雨となり、雨や風によって人的被害や住家被害、広範囲での停電が発生した。また台風第14号は沖縄地方から本土、伊豆諸島に接近し、伊豆諸島南部で記録的な大雨となり、伊豆諸島や東海地方で土砂災害が発生した。

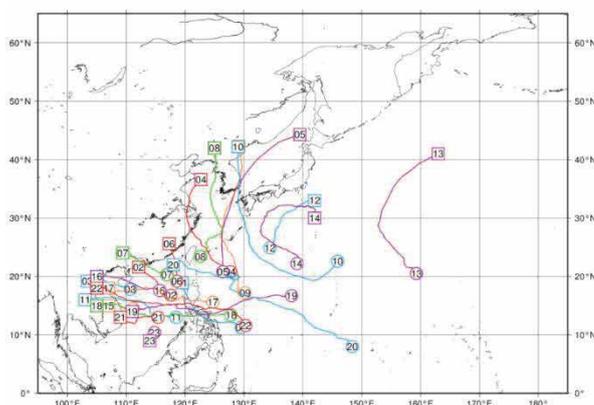


図 1.3-8 2020年の台風経路図  
経路の両端の○と□は台風の発生位置と消滅位置、数字は台風番号、点線は熱帯低気圧の期間を示す。

表 1.3-1 2020年の台風一覧

台風期間は日本標準時（JST）による。最大風速は10分間平均した値である。

台風番号	呼名	台風期間	最大風速 (m/s)	台風番号	呼名	台風期間	最大風速 (m/s)
T2001	ヴォンフォン	5/12 21時-5/16 21時	45	T2013	クジラ	9/27 3時-9/30 15時	30
T2002	ヌーリ	6/12 21時-6/14 9時	20	T2014	チャンホン	10/5 9時-10/12 3時	35
T2003	シンラコウ	8/1 9時-8/3 3時	20	T2015	リンファ	10/11 3時-10/11 21時	23
T2004	ハグピート	8/1 15時-8/5 21時	35	T2016	ナンカー	10/12 15時-10/14 21時	23
T2005	チャンミー	8/9 3時-8/11 15時	23	T2017	ソウデル	10/20 9時-10/25 21時	35
T2006	メーカラー	8/10 9時-8/11 15時	25	T2018	モラヴェ	10/24 15時-10/29 3時	45
T2007	ヒーゴス	8/18 9時-8/20 3時	30	T2019	コーニー	10/29 3時-11/5 21時	60
T2008	バービー	8/22 9時-8/27 15時	45	T2020	アッサニー	11/3 3時-11/7 15時	25
T2009	メイサーク	8/28 15時-9/3 15時	50	T2021	アータウ	11/9 3時-11/10 21時	23
T2010	ハイシェン	8/31 21時-9/8 3時	55	T2022	ヴァムコー	11/9 21時-11/15 21時	45
T2011	ノウル	9/16 3時-9/19 3時	23	T2023	クロヴァン	12/20 9時-12/22 15時	18
T2012	ドルフィン	9/21 9時-9/24 15時	30				

<sup>9</sup> 熱帯または亜熱帯地方で発生する低気圧を熱帯低気圧といい、そのうち北西太平洋または南シナ海に存在し、低気圧内の最大風速（10分間の平均風速）がおおよそ17m/s以上のものを日本では「台風」と呼んでいる。気象庁ホームページでは、統計を開始した1951年以降に発生した台風に関する様々な統計資料を掲載している。

<https://www.data.jma.go.jp/fcd/voho/typhoon/statistics/index.html>

<sup>10</sup> 平年値は1981～2010年の平均値。